

宮川 尚子
小池 正博
村松 定史
西田 青沙

共選

特選

半歌仙『蟬の声』の巻 石川県 本多の森連句会

瀬戸 瑞枝 捌

やがて死ぬけしきは見えぬ蟬の声 芭蕉翁

園児の遊ぶひまはりの丘 瀬戸 瑞枝

休日は名画名優楽しみて 密田 妖子

煙のこして過ぎるSL 高見よ志子

縁先に皆の出でくる雨後の月 池田みち子

両手に受ける零余子ころころ よ志子

茶屋街のつづみ間遠に西鶴忌 村戸 弥生

きつぷの良さが彼の持ち味 みち子

照れながら三々九度の盃をあげ 妖子

薬頼りにのぼるタラップ 瑞枝

国境を越える大河の滔々と 妖子

人新世へ知恵を集めて 瑞枝

ビル林立冬満月の渡りゆく みち子

地蔵に結ぶ赫いマフラー 瑞枝

原発に過疎救はるといふことも よ志子

崖つぷちより翔ける海鳥 弥生

スマッシュを決めしコートは花の中 みち子

遠く近くに畦塗の影 妖子

令和三年六月十三日 満尾 密田宅

入選

半歌仙『空吹き落せ』の巻 静岡県 伊東連句会「風」

半田 有杜 捌

さみだれの空吹き落せ大井川

芭蕉翁

蜘蛛の糸には光る水玉

長田久美子

古民家の梁の太さの際立ちて

半田 有杜

すり寄る猫の背中撫でつつ

齋藤 恵子

やあやあと影絵となりて月の客

菅沼 公子

萩と薄と酌み交わす酒

三橋 大吉

噛みしめる災害の地の今年米

大吉

最終列車トンネルに消ゆ

有杜

後れ毛をつとなどで上げる白い指

恵子

息できぬほどギョツと抱きしめ

有杜

十字架に誓う二人はハワイへと

久美子

梯子の棧に掛ける鮫鱈

大吉

海上へ冬満月の深き赤

大吉

頑張りすぎて過労死寸前

恵子

お供えは温泉饅頭山の寺

公子

畦焼く匂いバス停を越え

公子

高遠の堀埋め尽くす花筏

久美子

春告げ鳥とステップを踏む

執筆

令和三年五月二十日 満尾 伊東市中央会館

入選

半歌仙『あらたふと』の巻

東京都 春塘

清水 一楽 捌

あらたふと青葉若葉の日の光

芭蕉翁

武者人形の眉の太々

清水 一楽

達筆の札状来たり父の字で

岡本 利英

せせらぎを聞く書齋三疊

一楽

望くだり番犬が尾を丸め寝ぬ

利英

ふはりと開く松茸の笠

一楽

深く澄む山気に心放ちやる

利英

スタンダールで恋のレッスン

一楽

本捨ててはやくベッドにいきましょう

利英

もうじき夫は定年退職

利英

公園に濡れ落葉族をちこちに

一楽

旅にしあれば凍月を友

利英

藁沓に脛巾なまはげどやどや来

一楽

胡坐をかいて酒をよばれん

利英

余り物持ち寄り開く子供食堂

一楽

釈迦牟尼の掌にゐるわたしたち

利英

千年も寸時に過ぐる花吹雪

一楽

しやぼん玉にも映る浮雲

利英

令和三年五月十日 満尾 文音

入選

半歌仙『京にても』の巻

愛媛県

白水台連句会

名本 敦子 捌

京にても京なつかしやほととぎす

芭蕉翁

新樹句へる格子戸の内

名本 敦子

掛札の書道師範の文字褪せて

大西 素之

一年坊主手を振ってゆく

岡田伊勢子

お待ちかね婆の得意の氷頭膾

二神 重則

池の水面の月に皺寄る

杉山 豚望

山寺のあざやかすぎる天狗茸

大月 西女

炎上覚悟禁断の恋

素之

黄泉までは二人を追へぬパラッチ

敦子

近松はんの芝居大うけ

重則

野良猫に餌やるほかは暇でして

伊勢子

神の留守とて気の緩む禰宜

西女

たま風に飛ばされさうな昼の月

素之

すぐにひろがり噂・ウイルス

豚望

贈られし寝間着市松模様とか

重則

あつけらかんと笑ふ山脈

伊勢子

なごやかに差しつ抑へつ花筵

敦子

栄螺ぶつぶつ夢をみてゐる

豚望

令和三年五月十七日 満尾 文音

入選

半歌仙『猶見たし』の巻

愛媛県 白水台連句会

杉山 豚望 捌

猶見たし花に明行神の顔

芭蕉翁

低きこゑあげ深山鶯

杉山 豚望

子らと突く紙風船の転々と

大月 西女

いつしか減つてお持たせのチョコ

名本 敦子

泉水に映りさゆらぐ月の眉

大西 素之

後の袷に匂ふ樟脳

岡田伊勢子

美術展背伸びして見るミレーの絵

二神 重則

君は犬派で僕は猫派で

西女

古民家が愛の巣といふ若夫婦

豚望

星の入東風吹けば身籠り

素之

三代の政治狂ひで財は尽き

敦子

迫り上がりつつ役者見得切る

重則

蚤の痕？いえ、ワクチンを打った痕

伊勢子

ビールの泡は月に弾けて

西女

藍染の縫ひ目の粗き肩袋

豚望

バスよりどつと降りる巡礼

素之

藤房の夢みるごとく垂れさがり

敦子

影に驚き逃げる鮎の子

伊勢子

令和三年五月二十八日 満尾 文音

入選

半歌仙『からかさ』の巻

埼玉県 連遊さろん

浅沼 小葦 捌

傘に押し分け見たる柳かな

芭蕉翁

無言のうちに畦塗りの影

浅沼 小葦

さえずりは村の隅まで満ち満ちて

岡部七兵衛

画帳を開く広き縁側

齋藤 桂

寄り添うて猫も見上げる月の客

密田 妖子

団栗独楽で遊ぶ幼な等

城 依子

蓑虫の夢はどんなか知りたくて

小葦

ブログにつづる趣味の生活

七兵衛

膨らみし乙女心は果てしなく

桂

硝子の靴をプレゼントされ

妖子

晴れやかに且莊厳に祝婚歌

依子

紺碧の空群青の海

小葦

威勢良い声に暴れる荒神輿

七兵衛

月の厨にラムネ冷やされ

桂

血糖値さがれさがれと一万歩

妖子

鉄道員に憧れており

小葦

旅人も座に加わりて花見酒

依子

かなたの峰にかかる初虹

七兵衛

令和三年六月九日 満尾 ネット文韻

入選

半歌仙『塩鯛の』の巻

富山県 いなみ連句の会

杉本 聰 捌

塩鯛の齒ぐきも寒し魚の店

芭蕉翁

値切り小切りの軋む年の瀬

杉本 聰

最新のロボット犬をせがまれて

北野眞知子

父親ゆずり頑固一徹

密田 妖子

海鳴りへ笛吹き通す望月夜

村戸 弥生

厨の隅にごろりぼうぶら

眞

村人の総出で見遣る朱鷺の舞

聰

手が触れ合へば次のステージ

弥

同床の同夢いつしか七色に

妖

耀変茶碗ためつすがめつ

聰

巴里祭にマリア・カラスを月と聴き

眞

ヨガで息抜く夏籠の僧

妖

母方の祖は皇族の落胤で

弥

流人小屋ある山峡の里

眞

診療所頼り甲斐ある若き医師

聰

絵舩作りが最近の趣味

弥

散り敷ける花の褥に酔ひて寝む

妖

胡蝶追ひかけ猫がぐるぐる

執筆

令和三年五月二十六日 満尾 Eメール文音

入選

半歌仙『わせの香や』の巻 富山県 いなみ連句の会

杉本 聰 捌

わせの香や分け入る右は有磯海

芭蕉翁

月代いそぐ二羽の候鳥

杉本 聰

栗飯の味を褒めざる者もなし

野原 裕人

テレビ小説続き気になる

白石 藻思

ステテコの父は日課のストレッチ

聰

暑中見舞いに届く絵葉書

裕人

入口に鳥居そびゆる村ありて

藻思

旅の一座の列が到着

聰

千代紙を折る指先の柔らかく

裕人

視線合せば頬のあからみ

藻思

シャンペンの泡と消えゆく淡き恋

聰

中華街から豚の逃げ出す

裕人

複葉機凍月すべり宙返り

藻思

鯛焼き啣へ仰ぐ新発意

聰

目薬の狙いなかなか定まらず

裕人

日記ゆつくりめくる貝寄風

藻思

来し方は夢か現か飛花落花

聰

お玉杓子に足生えるころ

裕人

令和三年六月十四日 満尾 Eメール文音

入選

半歌仙『さまざまな事』の巻 神奈川県 伊勢原連句会

根津 忠史 捌

さまざまな事おもひ出す桜かな

芭蕉翁

天守に架かる二重初虹

根津 忠史

太極拳緩舞の集ひのどらかに

大津 博山

旬のおかずをつめる弁当

今井みつ代

楽しみはスイツチバック月の駅

忠史

蒼い瓢箪郷の遠近

博山

蟻螂が玄関先に居座つて

みつ代

縄文ヴェーナス公開に列

忠史

ぼつちやりのプロゴルファーは愛想よく

博山

やつと告白なんて呼ぼうか

みつ代

大川の舟を見送る夏座敷

忠史

碧眼の僧浴衣着こなし

博山

すばらしいバイオリンの音うつとりと

みつ代

歳末ジャンボ的中は夢

忠史

雪の精来るか雲間に月隠れ

博山

家紋屋号も刻む玉垣

忠史

勢揃ひ首途の宴を祝ふ花

みつ代

チョットコイと呼ぶる小綬鶏

博山

令和三年六月九日 満尾 文音

入選

半歌仙『すみれ草』の巻 東京都

岡部七兵衛 捌

山路きて何やらゆかしすみれ草

芭蕉翁

悠然として穴出づる臺

岡部七兵衛

縁うらら好きな画集を開きゐて

城 依子

いつもにつこりやややほご機嫌

齋藤 桂

珍しく隣家にぎやか望の月

八尾暁吉女

ぶらりぶらりと瓢箪が揺れ

依子

世の中はこんなものだと濁り酒

七兵衛

美女に滅法弱き住職

暁吉女

想ひ込め歌ふ得意のラブソング

桂

苦節十年舞台一筋

七兵衛

砂浜に続く足跡どこまでも

依子

遠くの船は島影に消え

桂

よき間にて話促す京団扇

暁吉女

暑中休暇のふる里の月

依子

白髪も禿も肩組むクラス会

七兵衛

時計の針は前へ前へと

暁吉女

九十九折ぬければ見える花大樹

桂

仔馬にカメラ向ける旅人

依子

令和三年五月十一日 満尾 文音

入選

半歌仙『葱白く』の巻

岐阜県 桃雅会

中森美保子 捌

葱白く洗ひたてたるさむさ哉

芭蕉翁

ふくら雀の鳴き交はす声

中森美保子

少年の夢見る瞳輝きて

杉山 壽子

机の上に本を積みあげ

寺田 重雄

抽象も具象も並ぶ美術展

長谷川芳子

出窓に浮かぶ端正の月

高橋すなを

仮装する手作り服でハロウween

島田 裕子

スマホ決済わりと簡単

古賀 幹子

かの人は難攻不落そこがまた

中西 静子

同じ職場に密かなる恋

八雲 鏡湖

家飲みの酒一合と乾き物

波多野茂子

折り紙持つて置薬の来る

壽

月涼しスカイツリーはカラフルに

雄

ひねもす眠る夏痩せの猫

芳

潮騒を~~辿~~りてゆけば漁師宿

を

卒業記念クラスメートと

幹

掌に花びら受けてはしやぎゐる

静

風やはらかに渡る尾張野

湖

令和三年五月三十一日 満尾 文音

入選

半歌仙『瓜の泥』の巻

東京都 猫蓑会

鈴木 千恵子 捌

朝露によごれて涼し瓜の泥

芭蕉翁

手足の白き避暑の少年

鈴木千恵子

時計台スケッチすれば鐘鳴つて

杉本 聰

決まったコース猫の見回り

千

昼月を挿頭に気取る大擲

聰

草相撲にも里の横綱

千

西鶴忌ボータイ似合ふ老教授

聰

古書の山から付喪神出る

千

酔ひ醒めの水に勝れる美味はなし

聰

芸妓がひとり辿る雪道

千

木菟が密会覗く月の森

同

アップテンポの着メロが鳴り

聰

病院の待合室の長い椅子

千

株は止めるが父の遺言

聰

験担ぎ靴は必ず左から

千

江戸日本橋七つ立ちする

聰

初花はまだ薄墨の靄の中

千

お玉杓子は屈託もなく

令和三年七月十三日 満尾 文音

入選

半歌仙『花見哉』の巻

愛知県 ころも連句会

間瀬 芙美 捌

京は九万九千くんじゆの花見哉

芭蕉翁

薨の波に仔猫親猫

間瀬 芙美

春障子味噌汁の香漂いて

稲垣 渥子

スイッチ押してテレビお休み

山本 秀夫

月よりの使者の来るまでひと眠り

由川 慶子

朱鷺のつがいが飛翔する島

渥

幸せにみんな頷く芒たち

芙

あなたはわたし私もわたし

慶

今日もまた二身一体夢の中

秀

活断層を駆ける狼

芙

フクシマは未だ混沌冬田面

渥

ウクレレを手に仰ぐ天空

秀

青簾白雨過ぎれば月淡く

芙

玉虫のいる寺の草叢

慶

武骨な字連ね父から便り来る

渥

酒を断つなど何とつもらん

芙

裏山は色さまざまな山桜

秀

きしやご遊びに笑う幼ら

慶

令和三年五月十四日 満尾 文音

入選

半歌仙『夏草や』の巻

三重県 城連句会

湯浅 重好 捌

夏草や兵共がゆめの跡

芭蕉翁

師を真ん中に冷酒一献

湯浅 重好

吹き硝子見る見る色の変り来て

杉野 朝音

ジャポニズムからアールヌーボー

石橋山野子

望の月スカイツリーの塔の先

好

かりがねの声響く川べり

音

寅さんはトランクひとつ秋祭

野

あの娘の好きなお土産を買ふ

好

思ひ出の清水坂で待ち合はせ

音

あれこれと言ひ分かりあふ老

野

突然に行く手を阻むウイルス禍

好

方丈の庭手入れこつこつ

音

灯籠の影をとらへて月凍つる

野

犬の遠吠え息白く吐き

好

五輪の火絶やすわけにもいかねども

音

公魚釣りは祖父のポイント

野

花万朶借景をなす逆さ富士

音

黄蝶舞ひ立つ古里の空

執筆

令和三年七月十九日 満尾 文音

入選

半歌仙『冬籠り』の巻 埼玉県 さくら草連句会

澁谷 盛興 捌

冬籠りまたよりそはん此はしら 芭蕉翁

竹の小筒に挿せる侘助 澁谷 盛興

千枚の棚田の無事を見届けて 山中 土筆

駐在さんと交はず挨拶 小泉 桂

月天心雲と星とのかくれんぼ 大久保風子

鶴鴿たどる庭の飛石 高山 鄭和

水の香を二つに切つて新豆腐 城山 九天

珍客来ると磨く黒ぢよか 木之下みなみ

立膝で迫る彼女のだ迫力 和

通訳マシン頼り睦言 興

ボランティアオリピックに気後れし 桂

海向く椅子に月の涼やか み

瓜番の交代時を狙はれて 風

霊気身に浴びくぐる茅の輪を 九

しみじみと珈琲啜る休刊日 桂

諸子追ひしは懐かしの歌譜 筆

花の雲大和まほろば埋め尽くし 和

沈む夕日に心うららか 九

令和三年七月二十一日 満尾 Z o o m

(日本連句協会リモート連句室利用)

入選

半歌仙『庭掃て』の巻 東京都

遅刻坂連句会

久保田 田朴 捌

庭掃て出ばや寺に散柳

芭蕉翁

携へゆかむ有明の月

久保田田朴

番小屋の軒に猪肉吊されて

武井 蛙女

千代紙の舟空缶にあり

田中 安芸

いつの日か宇宙旅行が日常に

半田 有杜

縄跳びどんと着ぶくれの子等

今富 千辺

深更の凍湖を渡る人の影

蛙女

コンビナートの煙北より

安芸

逢へなくて逢へなくなつて逢ひたくて

千辺

しがみついたらまうはなさない

有杜

ワクチンをすり抜けウイルス逞しく

蛙女

止まったままの時の記念日

安芸

走馬灯追ひかけ月のしづかなり

千辺

つついてみたき仰向けの猫

有杜

百年の大黒柱あるじ顔

田朴

風に背押されみちのくの旅

蛙女

在りし日の師へ一献を花の下

〃

ハモニカ吹いて春光のなか

千辺

令和三年七月二十八日 満尾 ZOOM

(日本連句協会リモート連句室利用)